



身近な自然の観察・記録活動 石神井川緑道版

2021.5.28

一人ひとりの自主活動 だれでも参加できます

活動：月2回(第二木曜日・第四金曜日)10:00より(雨天中止)
コース：帝京大学付属病院北詰・御成橋たもと → 金沢橋
問合せ・連絡先：090-8646-9757 木村松夫 com-matchan@hotmail

6、7月の石神井川観察は6/10(木)、6/25(金)、7/8(木)、7/23(金)
10:00 帝京大学病院北側の御成橋たもと出発

前回「草刈りをしないと街路の下はわくわくスペースになる」と書いたとたんに、5/28は
全域で草刈りが行われて、おやおや

まだ5月なのに春はとっくに終わって夏になる前の端境期なのでしょう。前回は青々としていたイヌムギやカモジグサは茶色に変色して根倒れ、加えて、やってきましたね、お役所の草刈り。これが年に何回も行われないので1回の草刈りはかなり徹底したものだ。石神井川緑道は茶色の地肌むき出しになっていました。

徹底した草刈りを行っても、2週間もすれば野草は生えだし、しかも強い野草だけが生き延びてきて、大事にしたい野草には生きにくい環境をつくってしまうので、民家が隣接している場所が少ない石神井川緑道の加賀エリアはもう少し緩やかな草刈り法を考えても良いと思うのだけれど、そういう融通が利かないのがお役所仕事。

まちなかのみどりをどうするのかは文化の問題

そもそも「街路では植栽された植物以外の地面から生えてくる野草は全部敵である」という考え方が改められなければどうにもなりません。そこに住んでいる人々や利用する人々の価値観が変わらなければ役所の考え方も変わることがないので、「まちなかに野草を残そう」という文化を根付かせることが必要です。でも、それははるかに遠い「未来課題」なのかもしれません。

わずかな救いは、草刈り作業中の職人さんが白花のツユクサとムラサキカタバミの大きな株を残して刈っていて「これだけは残した方がいいと思って」と言っていたこと、とても珍しいと思われるウマノアシガタやキランソウが生えている場所では緩やかな草刈りが行われていたことです。

何よりもうれしいのは、最近、石神井川緑道の観察者が増えてきたことです。4/8=3名、4/23=5名、5/13=3名、5/28は5名で、エコポリのwebを見てやってきた方が参加。写真を撮るのを忘れて会話を交わすことに夢中になりました。そのおかげで、本レポートの1面は写真なしです。

近頃このレポートに返信が返ってくるようになりました

5/13 付けで「分からない花続出」として紹介した野草にはMさんからこんなお便りが届きました。

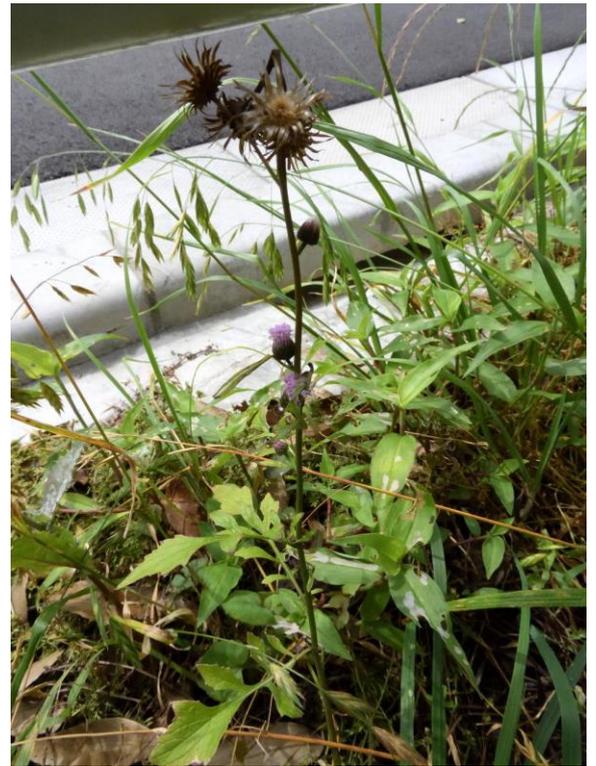
「石神井川観察レポート見させて頂きました。1ページ目はキツネアザミだと思います。分からない草花のうち緑の葉っぱだけのものはオオマツヨイグサ、黄色い星型の花はマンネングサではないでしょうか？」

山口は梅雨入りしました。平年より3週間早いそうです」

Mさんはお母様の介護のために実家の山口県に通っていらっしやっていましたが、コロナ禍で東京との往来が困難になり、山口に行きっぱなしの暮らしが1年以上上続いています。ご苦労様です。頑張ってください！

まだ現役で働いているので、毎回の参加が難しいTさんは、時折、自分のお宅の近くや訪れた野草園の観察レポートを送ってくれます。

最近まったく顔を見せなくなったKさん、どうしているのかと思っていたら、エコポリの「一斉調査」だけは自主活動で続けているようで、「ネジバナを見つけました」というレポートが寄せられました。



↑ 5/28 まだ生き残っていた株。花の形を見ると、確かにキツネアザミ

そこら中に「秋の花」早くも咲きだす



石神井川緑道一帯は秋の様相。左からセイタカアワダチソウ（花穂の形が通常とは違いますが一つひとつの花は確かにセイタカアワダチソウ）、ススキ、センダングサ、ヨモギの花